慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	エマニュエル・ジョン・ヘヴィ著『竜の抱擁：中共とアフリカ』
Sub Title	E. J. Hevi, the dragon's embrace, the Chinese communists and Africa
Author	小田, 英郎(Oda, Hideo)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1968
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.41, No.7 (1968. 7) ,p.139- 144
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19680715-0139

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

Emmanuel John Hevi,

The Dragon's Embrace: The Chinese Communists and Africa

F. A. Praeger, New York, 152 pp.

エマニュエル・ジョン・ヘヴィ著

『竜の抱擁——中共とアフリカ——』

一、一九五六年におけるエジプト（現アラブ連合）との国交樹立に始まり、一九六三年十二月から一九六四年二月にかけての周恩来・陳毅のアフリカ一〇ヵ国訪問を契機に著しく大規模化した中華人民共和国（以下中国と称す）のアフリカ政策が、一九六五年における第二回AA会議（アルジェ会議）の流会によつて大きく挫折し、さらにその後に頻発したアフリカの軍部クーデターによつて中国の影響力が大きく後退したことは、すでに周知のとおりである。アフリカにおけるこうした情勢の転換について、中国の陳毅外交部長は「それはただ局地的な、一時的な現象であり、真の革命家にとつての試練の時期である」といささか楽観的とも思えるような論評をおこなつている。果してそう見ることが妥当であるか否かは容易に断じえないが、いずれにしても、われわれは「アフリカ人の中国観」を材料の一つにとりあげることなしには、この問題を分析・検討することはできないであろう。

ところで一口に「アフリカ人の中国観」といつても、従来、他の文献のなかにでてくるアフリカ人の断片的な談話程度のもの以外に、依拠しうる材料はほとんど存在しなかつた。そうした情況に照らしてみて、ここに紹介するE・J・ヘヴィの著書は、一五〇頁余の小冊子とはいえ、実際に北京に滞在した一アフリカ人の、直接体験に裏打ちされた「中国観」として、十分な稀少価値を認められるべきであろう。

著者E・J・ヘヴィの経歴について一言すれば、かれはガーナのココア農民の子として生れ（年齢不詳）、ローマン・カトリック信者としての家庭教育をうけ、さらにセント・オーガスティン・カレッジ、アグレー・メモリアル・カレッジ卒業後、母校で教職につき自然科学、衛生学を担当した。一九六〇年十一月、ガーナ政府奨学金をえて医学研究のために北京へ留学し、一年半の滞在ののち帰国したが、北京での直接経験によつてマルクス主義と新中国にいたく失望し、また幻滅を感じたといわれる。かれの前著 *An African Student in China* (1964) は、その当時の経験をまとめたものである。一九六二年に帰国したものの、エンクルマ政権に対する反感を抑えることができず、進んでナイジェリアに亡命し、一九六六年二月二

十四日の軍部クーデターでエンクルマ政権が倒れるまでその地にとどまつた。現在はガーナに在つて、「母国ガーナを、真の民主主義者が誇れるような国にしようと努力している」ところである。

つぎに本書の構成を目次で示しておこう。

序　言

一　「五原則」と中共の実践

二　北京の戦争と平和の理論

三　永久革命

四　第二次アフリカ争奪戦

五　革命的状況・その一

六　革命的状況・その二

七　後進性へのいざない

八　アフリカへの信念

以上のほか、附編として、周恩来のアフリカ訪問旅行（一九六三年十二月～一九六四年二月）の日程表とその解説、およびアフリカと二つの中国との外交関係一覧表（一九六六年五月現在）が収録されている。

それでは、以下著者の論旨を簡単に跡づけてみよう。

二、まず、その「序言」において著者は本書を執筆した意図を明らかにする。すなわち著者の認識によると、現代のアフリカは複雑な冷戦的諸潮流によつて激しく揺りうごかされており、しかも、そうした情勢は今後なおしばらくは続くと考えられる。したがつて、いまアフリカ人のとりうる最良の策は、この複雑な冷戦的諸潮流がどう流れるかを測定することである。そうした試みこそは、アフリカにとつて、経済的自立と政治的安定へ向う重要なワン・ステップである。

ところで著者は、現代における冷戦の主要な軸を、東西の対立および中ソの対立と見る。したがつて、国際的舞台とくにアフリカにおける中国の行動様式を把握することが、極めて大きな意義をもつのである。そこで著者は、「中国のアフリカ政策とその動機ほど複雑な問題は例が少い」としながら、「本書では、アフリカに対する中国人の意図はおそらく我々アフリカ人の最上の利益を計ろうとするものではないことを示そうというところに焦点を絞り」具体的には、周恩来がアフリカ諸国訪問中に公約した「五原則」が日々いかに破られているかを見ることによつて、「冷戦の一潮流がどういう流れ方をしているかを示しうれば、私の目的は果される」と、序言を結ぶのである。

そうした問題意識をもつて、著者は第一章において、中国の対アフリカ政策を規定している（はずの）「基本五原則」「対外援助に関する八原則」を俎上にのせ、「この五―八原則のような高邁な原則をアフリカ諸国との関係においてもつている国に対しては、最高の敬意と感謝を捧げるべきであろう」としながら、「しかし千の原則をかかげて一つも守らないよりは、一つの原則しかかげずにそれを忠実に守る方が値うちがある」と痛烈な皮肉を飛ばす。

要するに著者の見方によれば、毛沢東の中国は、一方で平和五原則をうたいながら、他方でビルマ、ネパール、シッキム、ブータン

に対して外部から圧力をかけ内部で破壊活動をおこなうとともに、インドに対しては膨脹戦争をしかけ、チベットに対しては血なまぐさい征服とさいげんのない圧迫をくわえたのであり、国内では一九五七年に百花斉放百家争鳴を約しながら、咲かせておいてつみ取り鳴かせておいて打ち落とすの挙にでた「油断のならない国」である。周恩来が一九六三年十二月から一九六四年二月にかけてアフリカ諸国を訪問したさい、中国人民とアフリカ人民の古い歴史的結びつきを強調し、これこそ両人民の友好関係の基盤であると主張したが、もしそうであるならば、インドその他近隣諸国こそ中国ともつとも緊密な友好関係になければならないはずである。しかるに中国はこれら近隣諸国に対して膨脹主義的な政策をあえてとり、また自国人民に対する自由と正義の約束すら守ろうとしない。このような中国が「五―八原則」をいかに喧伝しようともアフリカ人に対して忠実だなどという保証がいつたいどこにあるだろうかというのが著者の論理である。

続いて第二章では、中国の「戦争と平和」の理論を厳しく批判する。まず著者は、エチオピアのハイレ・セラシエ皇帝やチュニジアのブルギバ大統領が周恩来に対して、中国とアフリカの基本的な不一致点は戦争と平和の問題にあると語つた事実を踏まえながら、「戦争は資本主義の不可避的部分だという命題は資本主義と帝国主義とを混同していることから生じた誤れる観念であり、その命題がさらに、非資本主義的体制は必然的に非帝国主義であるという誤れる結論を引きだす」と主張する。著者の見解によると、たしかに第二次大戦以前にあつては非資本主義的帝国主義国の存在など考えられなかつた。しかし最近の歴史は、帝国主義が資本主義の独占物でないことを示している。特に新興社会主義諸国のなかには、警戒すべき帝国主義的性向を示している国があり、中国はその悪名たかい事例である、という。この場合著者は、帝国主義イコール戦争勢力という認識にたつているのであつて、そのために、平和共存路線を強く否定し「冷戦は社会主義国にとつて有利であり、緊張状況は革命闘争の発展にとつて好ましい状況である」とする中国は戦争勢力すなわち帝国主義者という烙印を押されるわけである。また著者は核戦争の結果についての毛沢東の言葉（「もし人類の半分が死滅しても他の半分は依然として生きのこるであろう。しかも帝国主義は完全に滅び、全世界を通じて残るのは社会主義だけであろう。そして半世紀ないし一世紀のうちに、人口はふたたび失つた半数以上の増加を見るであろう」）を引用し、これが、七億中国人の生命と運命を支配し、アジア、アフリカ、ラテンアメリカ人民を自己の翼のしたにかくれるようにさし招いている人物の言葉なのだと、強い語調で論難する。さらに著者は、中国が「核兵器の全面禁止」に固執して部分的核停条約に反対していることを中国の好戦性の証左と見、一九六四年十月に第二回非同盟会議（於カイロ）が全世界の国に核停条約調印を訴えかつ核兵器の製造を非難する声明をだしたにもかかわらず、中国がこれと前後して第一回核実験をおこなつたのは、非同盟会議に対する侮辱である、と非難するのである。

以上のような認識にたつ以上、著者が中国の意図を、対米・対ソ

の両面的冷戦を有利に展開するためにアフリカを毛沢東的ゲリラ戦争の一翼に組みこむとしていると解釈するのは当然であろう。

第三章「永久革命」では、中国の望んでいる革命とアフリカの求めている革命とがまったく違うことを指摘する。周恩来はアフリカ訪問中モガジシオで「アフリカは絶好の革命情勢にある」と語ったが、その言葉はただしいとしても、「革命」の内容が問題である。中国人がいう革命とは「被抑圧階級による暴力の行使を意味し、革命戦争を意味する」のであって、「共産主義の歴史を通じて物語はいつもおなじ、戦争、混乱、革命、そして共産主義政権である」。しかし、アフリカ人の求めている革命は経済的、社会的、文化的側面における急激な進歩・発展を意味するのであって、中国人のいうような暴力革命ではない。コンゴ（旧ベルギー領）の例が示すように、暴力革命はアフリカに好結果をもたらさない。小国に混乱が起れば、大国は自分の利益をおしすすめ自国とおなじ政治体制をおしつけるべくこれを利用するだけである。しかして中国がアフリカの革命を鼓吹する場合、その主たる目的は、アフリカに混乱を起すことであり、またすでに起つている混乱を悪化させることである――というのが第三章の著者の論旨である。

第四章「第二次アフリカ争奪戦」においては、著者はアフリカにおける中ソの指導権争いを、十九世紀における西欧諸国のアフリカ分割にたとえ、「現在社会主義諸国は、かつて資本主義諸国が犯したのとおなじ犯罪を犯している」というニエレレの言葉を引用しつつ、中ソの「第二次アフリカ争奪戦」を批判する。アフリカに接近しこれを自己の権力軌道にのせようと努めている勢力はむろん中ソだけにかぎらないが、それにもかかわらず著者が中ソによる争奪戦と見た理由は、この両国が、そのイデオロギー的立場から、アフリカの前途にはただ一つマルクス主義的社会主義しかなく、したがって国際政治的にも中ソのいずれかに系列化される以外に道はないという恣意的な判断にたつて対アフリカ政策を展開している、と見ているからである。この点については、「アフリカ社会主義」に対する中ソ両国の評価が、もつともよくそれを示している。たとえば、ソ連の代表的アフリカ研究者であつたポテーヒン教授は「アフリカ社会主義などというものは存在しないし、マルクス・レーニン主義的・科学的社会主義以外に社会主義はない」と述べ、「アフリカ社会主義とは、資本主義的発展路線のために勤労階級を欺く手段である」ときめつけているし、中国もまた、アフリカ社会主義について厳しい評価をくだしている（たとえば、周恩来がアルジェリアを訪問したさい、アルジェリアが社会主義を建設中であると称するにたるかどうか四時間余にわたつて討議し、結局共同コミュニケからその文言をはずしたが、このことは、中国の基準からすれば、ベン・ベラのアルジェリアは社会主義と呼びえないと断定されたことを示すものである、と著者はいう）。要するに著者は、「ソ連が民族解放を支持するのは自己の反西側路線にアフリカを組みこむためであり、中国がアジア・アフリカの連帯を主張するのはソ連をアフリカから締めだすためにすぎない」と論断し、「周恩来が我々に自力更生を説くなら、アフリカ的状況やアフリカ人の要求に合つた、アフリカ独自の社会主義を

なぜすすめないのか」と中国の政策を批判し、「非アフリカ人がアフリカに対して真の政治的協調を示す最良の方法は、アフリカの状況にもつとも合致した体制を我々に独自の方法で探求させ、実験させ、それを採用させることである」と提言するのである。

ついで第五章、第六章では、現在アフリカ諸国がいだいている革命的状況を明らかにし、その革命的状況が外部勢力にいかに利用されやすいか、そして現実に中国がいかにそれを利用してきたかを説明している。著者によると現在アフリカは政治的、経済的、社会的な全面的革命の「生みの苦しみ」を経つつある。そしてその状況は、レーニンが主張していたような暴力革命へと操作される危険性をもつた革命的状況であつて、①植民地政権による圧力への反抗を要求する状況（ポ領アフリカ、南ア、ローデシア等）、②独立アフリカ諸国内部の動乱を育てるような内的緊張状況、の二つに類別される。こうした革命的状況を利用しようとする外部勢力は数多くあるが、とりわけ危険なのは中国であると著者はいう。なぜなら中国は、アフリカ諸国との関係を規定する「基本五原則」の第五項で「アフリカ諸国の主権は、その他のすべての国家から尊重されなければならないことを主張し、どんな方面からの侵略や干渉にも反対する」と明言しながら、実際には社会主義兄弟国であるソ連からさえも「中国の同志たちは……中国共産党中央委の六月十四日付書簡をロシア語で大量に印刷してモスクワその他のソ連諸都市で不法にばらまき……我国の主権をはなはだしく侵害した」（一九六三年七月十四日「プラウダ」紙）と非難されている国だからだ、というのである。

著者は中国がコンゴ（旧ベルギー領）、ルワンダ、ブルンジ、カメルーン等で反乱を助長し操作した例を具体的に説明しているが、たとえばコンゴに関しては、一九六四年一月に始まつた東部での反乱をピェール・ミュレレ、クリストフ・グベニエ、E・B・デビッドソン、ガストン・スミアロ等の指導者を通じて遠隔操作したこと、ガムボナ、イムプフォンド等に中国の援助でゲリラ基地が作られ、甘邁大佐が中心となつて訓練を施したことなど、その叙述はかなり詳細である。また、中国が間接的に内政干渉をおこない、主権を侵害した別の具体例としては、中国が一九六四年八月の協定にもとづいてガーナへ軍事顧問を派遣し、中国の外交官がアフリカ各地からスカウトした青年たちにエンクルマのゲリラ訓練キャンプならびに「イデオロギー研究所」で訓練を施し、破壊活動の準備をしたことが挙げられている。

第七章「後進性へのいざない」では、周恩来が「対外援助に関する八原則」の第四項で述べた「中国政府が外国に援助をあたえる目的は、……援助を受ける国が自力更生、経済面で独立発展の道をしだいに歩みうるようにすることにある」という原則が批判の対象にとりあげられる。ここで著者がいわんとするのは、要するに、外国からの援助は九九％ヒモつきでありそれだけに危険もあるが、しかし現在の経済的状況からすればアフリカ諸国にとつて外部からの援助は不可欠であり、それなしでは、たとえ緩慢なペースであろうとも進むことすらできない、したがつて、周恩来の自力更生論はアフリカを後進性へと招くに等しい、ということである。

最後の章「アフリカへの信念」は、本書の主題から見てそれほど重要ではない。ただ単に、アフリカ自身が偉大な歴史的転換期を迎えていることを指摘し、中国は偉大な文明を誇る国であるけれども現在同国が用いている処方箋はただしくないと述べたのちに、「中国を憎んではならないが、信用してもいけない」、「自分自身を、アフリカを、そしてアフリカの将来を信ぜよ」という「心がまえ論」を提示しているだけである。

三、以上概括的に著者の論旨を紹介した。ここで展開されている議論は、一読して明らかなように、必ずしも十分な論証をともなつておらず、逆の立場にたつて論駁しようと思えばいくらでも論駁可能な問題を多く含んでいる。たとえば戦争と平和の問題にしても、一見好戦的ともとれる中国の立場は、「社会主義勢力が強化され、民族民主革命勢力の圧力が強まり、核兵器の発達によつて戦争抑止力の比重が増大したとはいえ、戦争勢力としての帝国主義の本質は変らない」といつた歴史認識を土台としたものであつて、著者のように戦争をあえて辞さない中国は戦争勢力であるという評価を安易にくだすことは粗雑にすぎるであろう。また自力更生論の評価にしても、外国援助を全面的に否定しているものでなく、自力更生を基本路線としたうえで、さらに外部からの援助を二義的なものとして認めているのであるから、必ずしも「後進性へのいざない」にはならないはずである。

このようにいちいち論駁すればきりがないほどであるが、しかし、我々が本書から汲みとるべきものは別のところにある。すなわち、たとえその論理が飛躍していようと粗雑であろうと、実際にこれが一アフリカ知識人の「ナマの中国観」だということである。むろん中国を訪れたアフリカ人は他に多くいるし、本書の著者と正反対の評価をする者もなかにはいるであろう。しかし、ここ数年来、アフリカでは指導者層のあいだに、著者とおなじ立場からの対中国警戒論がたかまつてきている。こうした警戒論は学問的な批判を超越した、ナマの政治の領域に根をおろしつつある。したがつて、我我はこうした中国観が現実にアフリカに根をおろしつつあるというこの事実に目を据え、それをもつともよく代表するのが本書であるという認識を、まず第一にもつべきであろう。

（一九六八・五・二〇）

（小田　英郎）

新明正道著『社会学的機能主義』

（一）

本書に題されている『社会学的機能主義』は、現代社会学においてその社会学的分析様式（あるいは分析モデル）の最も有力なもの